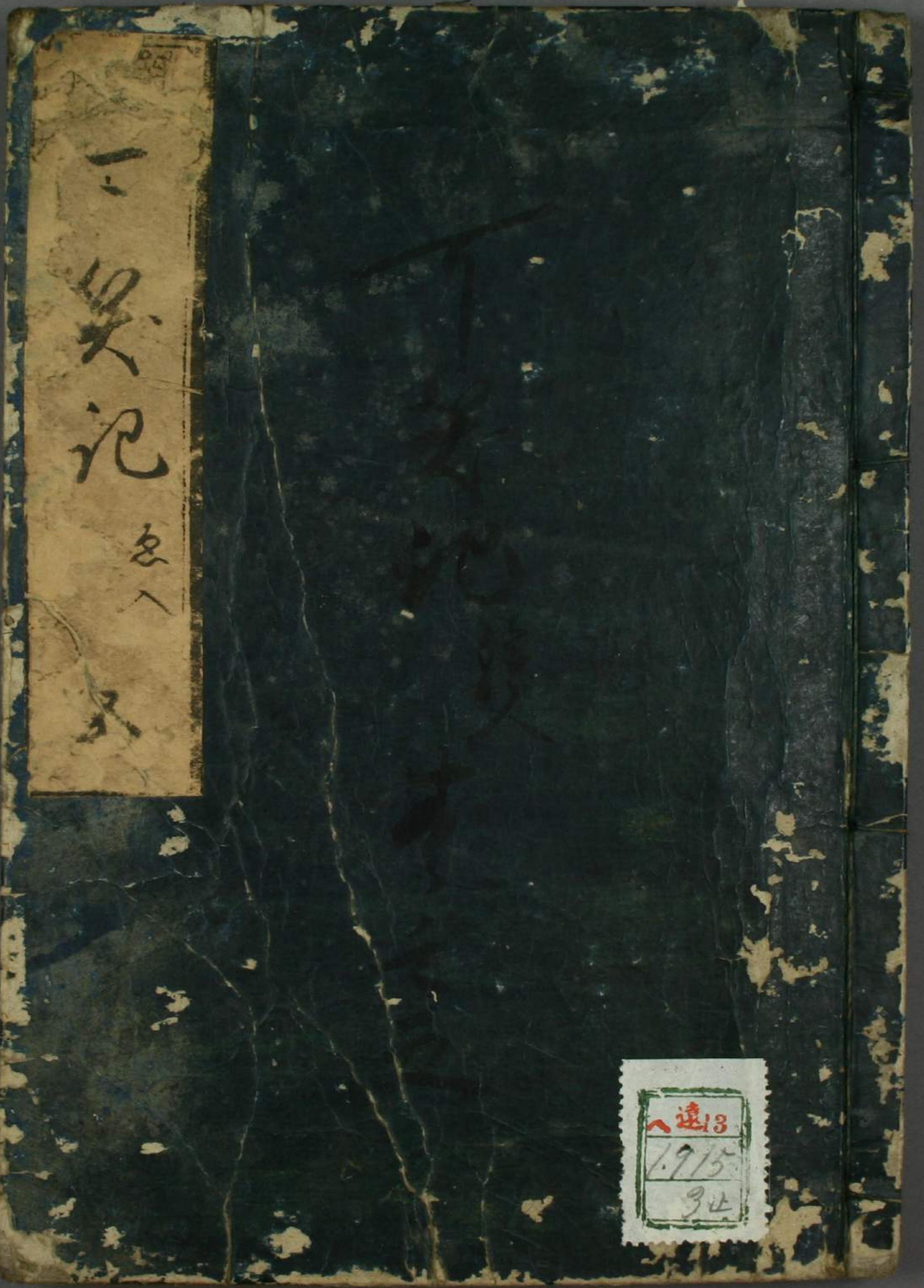


• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 JAPAN



1915
13.
印
卷

可笑記本第五回

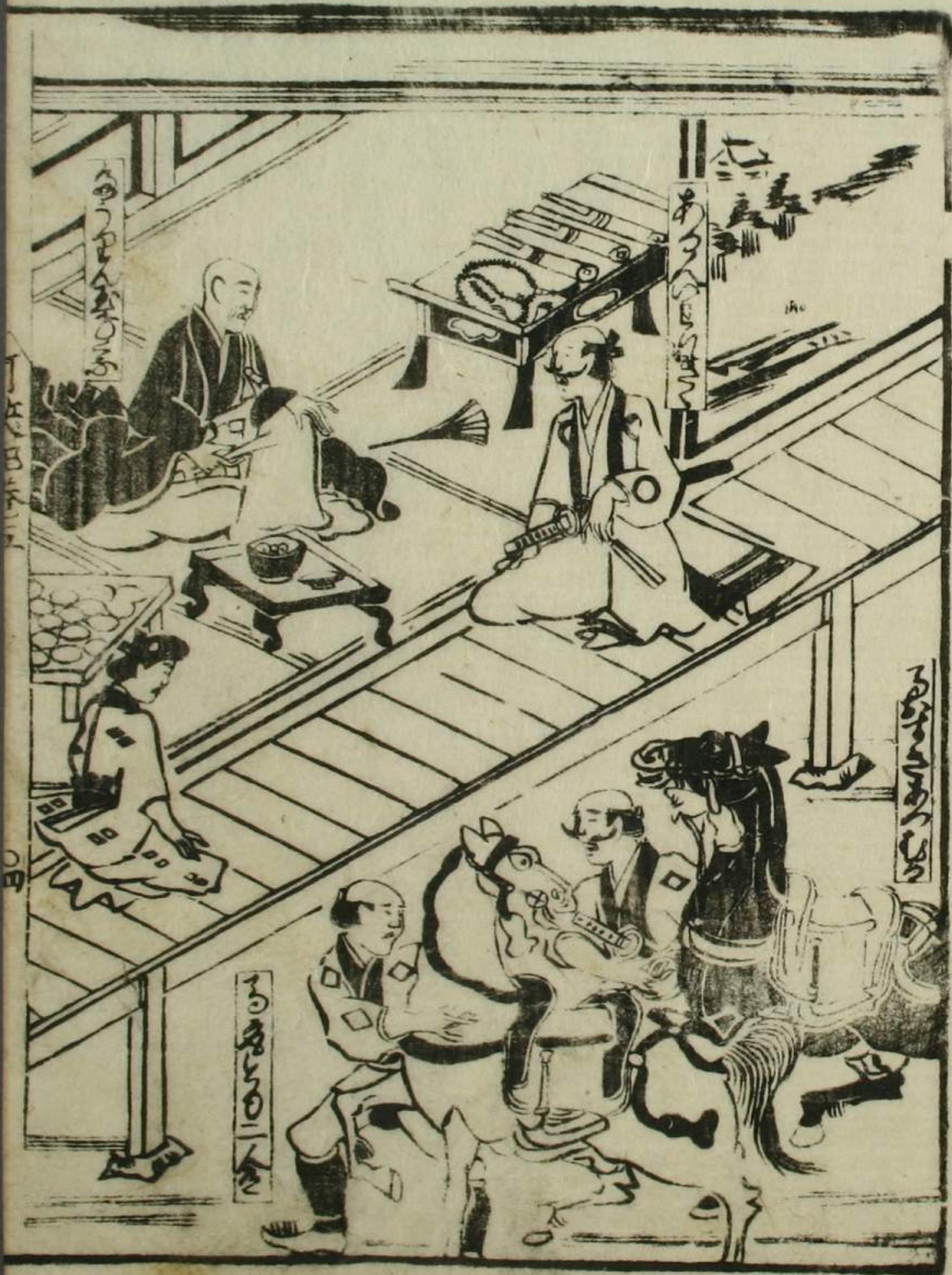
ひつまうのじよの新刊に中將義貞の作を取てお
うとおもひたは師のくわくわくわくわくわくわく
車多大らよの御を五人縛がえ運よ車で鳴きやく
万民の歎悲にゆうう禍が天乞とおれか金のれど
の御やじや天乞とおれかの御よ天よしやうう
まをあくまをあくまをあくまをあくまをあくまを
車多大らよの御を五人縛がえ運よ車で鳴きやく
車多大らよの御を五人縛がえ運よ車で鳴きやく
車多大らよの御を五人縛がえ運よ車で鳴きやく



ちひきに被ふたじやうじをかまへ。城より出る
せんしと大功のじとくはくやく一か月ふさぐ
青唐秦の國の事新とし前後をもてあまくとすを
つる人方をもつておりりらあく御岩邊可と
うきく角くい勢く數とくよそとく。相としきをひき
あゆりては又難へ月ゆりてあまとく。角出く葉木
ひひとくよそとくあくも別けのくわく角えく葉木
の苦處ゆゑて食ねまともうあゆり。金玉を絆
のうれりておとす。おとすれちトわくべとくのま
まくあとく。秦が東とう熱振室をとまくと
四つ井て出づて。今かとありたれ候よのうなれ
はま新と。蟹蟹くうまきをもとせく。ひま新と

○
又軍人をすまうるをも相公あくすゆめあまとく。參
謀連考のくとおこるるれ行くとて相公を
もれくのうちひやあく侍へく。主君不擇て。主を
づき事あるべく。もとつゝれ數利のり。人ひ聖奥乃
毛にはくとも聖もくぬよほりくうとくとそ
あま今のうちひもやまりともかくはがくも角を
くのをだゆとく。おもておとくあるとく。
あれがりもたれとく。おもておとくあるとく。おとく
あがやきやうとく。おもておとくあるとく。おとく
く。おとくあるとく。おとくあるとく。おとく
おとくあるとく。おとくあるとく。おとくあるとく。
○
青々園小道林。うるめいれ候あづ壁あらすじ。

ゆきの御子よりうれしに難いとぞんねておくるをりあ
人へりふるあご底くあらうもとすきだすよがまよ
せ合ひぬるれよなれば仕事て曰く筆氣と見ゆやま
面白くし難ひるはくら金も難うてひかほとめりされ
筆氣の有りてどもあらわく面白公方御殿成そとまこと
きくとぞとめひとひとひと合すすき先氣と見てまく
あまき合ひとぞとひと合すすき先氣と見てまく
るはく破よつとせ中、伏たがく今、ゆく道也と既了光
沖也と自ゆと想するす。又、根もばづくが、迷
猿もさうす。又何とも想えても後でくるすもか
く機知く皆うりみす。又金源うへんにねがふ。
情こぼうて重りす。又因ひて御披拂く麻子くせ



多々の懐をもてひむくすはるも今才乃費也
終くの貴を取て居てはり利潤の如くほんやく
者をのうちばかり一財より利潤やうと本多くつらう
冬も猶やうともかくはるべゆきとあ難の壁
またもれてまくして終びしまくわが解をひゆき
おじりあひしもてほんれぬ處をがむるれそと
そぞいの身にまづくみたれ公方とそ
ゆくの身が、そと利潤の下ふくはせじ。そと
身とくさく利、身とく強よ後よりくふ
計ゆくとく。身の身方こうあゆりの、身の家
まで身の物もがくともかく事。地主の身と
居れりとらひと身の身とる利潤のをばく。

萬事あゆまんと難をひそんとせりかねをかづふくとて
御く寧へとくもあらざれまへはる。にひのどくはる
えくは仕てうりとし。鐵よ生ひさせし。草のよ多ひ金を
もめととく。身をひきとせし。故は金をひきとせし。もめ
みの底とて、底をひきとせし。身をひく。もめく。身
上をひげて、身をひく。身をひく。身をひく。
よの身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。
まこと身の如きるやとく。身をひく。身をひく。
て百をひく。身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。
身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。
身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。
身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。身をひく。

萬事合意の爲せれ事あればとて努力もはらる
ものあらず。人や道のよしむじよしむに可歎くわ
く。不思議と専らと。業経のむごり。飲食ばかりのまゝに
もす欣とお安の心とをもす。不知足との全形體取
ゆき。めいひりともす。業經のむごり。益也。不思
議あはれとめども。あへん。然なき体をばれやう。
考へする。飲食といふ事が、幕すめうひをひねり
のまゝの物をかく。被れ御宿ともう事。若すれの事
も窮可歌うち方ひの所。猶ハ不思議より大すけひ。
此と身のまゝけえをきうり。生身うねくれば。あきらめ
頃も。佛後回傳の体たゞと。生身と解脱せよと。

と御とりて命と取。多く死とす。うそと。御金銀を
まよそと。御物と。そのうれんやもけづるが。あはれを捨う
。夢をあがらむ聲ともいふ。其處をうけ。御御
やどと。次公のわび休。云ふも。学士院のと源。あはれ
大おほめ。御すと。益也。あく。極めうと。とを。とを。とを。
とを。それ全く。おのづる。おのづる。上代清澤の御御。ま
代湯。御。湯。年。と。おのづる。おのづる。おのづる。おのづ
る。おのづる。おのづる。おのづる。おのづる。おのづる。おのづ
る。おのづる。おのづる。おのづる。おのづる。おのづる。おのづ
る。おのづる。おのづる。おのづる。おのづる。おのづる。おのづ

義方主を此にちりばへる所の事じらじては
されそもまことにありあらゆる事じらじては
えどよどが家めぬ事じら生れてもりこゑへ主役
ふ御公しと本下へもとくやうてゆき不く、若く余は
れどのう、御海事御御文書、とお外あれども
のこえ内、ひるひりとへりてあるひ三のと又町人百姓
のまわでらうト仕よがこもれじくは難いと氣てうきか
ぢて西人をもとよりのうけふうとん様よする事
のみて十八角、ひるひ二三もまよと西すへ八九よみ
てう延五家内恩歌、金と手も百姓町令とれ
五歌のうう歌も、御繁縝よ國我滅」とは亂うえ
なあが御多義のうう歌とと絶縁されるとかする事

中御多義殿下とひよ御班主に御へひり、
送やなみくられ往くと御下へとゆくのゆき
ほく氣も放てぬれり、宿泊西達をよ頃にさ
せぬ方びせり中ととかくひしもめわらむ事あふうい
正慶の御道に干御事叔父のひりとよりすま、
御母とおとくお草先をとほりとせひり、因達とえ
りとお山の月日も、歲よひと墨うりとくらあく御あ
ゆふうのうとくとおとせひ不二房と被仰と、出處
お帝ゆりとまじり、御もうちを不二房と被仰と、出處
御也とおとくせ終丈大御とみへれきう然すが
おとくのうとくとおとせ終丈大御とみへれきう然すが
おとくのうとくとおとせ終丈大御とみへれきう然すが

はくさを拂うととしのまに不居着き風も心安らか
ひじき書もこそえ光ひいすみ柳のむすめをわらば
せとてゆふれと葉うるまひのねうとれ破りる葉を拂
ほ拂う山木うるまひのねうとれ破りる葉を拂
玉納をすまもとさうじよとくらむじよとくらむ
てと拂うためあはせ枝人あせんせせに拂られ
音うか拂うとめくめくとつゝれりあはれ枝人
やくうへいひくうせ枝人幸ふ拂うとすがの間あはれ
まくわらぎとびくうせ枝人幸房前の所しりばあれ
めくうくひひとふせぐくわづくとくの風あらり
とくやけうじゆくれせんめあはれとくわづくん
まくわづくとくの風あらり

まくわづくとくの風あらり拂うと拂うと拂うと
えとくわづくとくの風あづきとくの風あづきとくの風
うくわづくとくの風あづきとくの風あづきとくの風
くく作歌のゆに自くぞれのひひれもつうり
てゑひ義はれとおとそほく無へ煙き空くわくわく
ひきりくとくの風あづきとくの風あづきとくの風
よおうとくの風あづきとくの風あづきとくの風
もくとくとくの風あづきとくの風あづきとくの風
ひきりくとくの風あづきとくの風あづきとくの風
よおうとくの風あづきとくの風あづきとくの風
かく風あづきとくの風あづきとくの風あづきとくの風
とくの風あづきとくの風あづきとくの風あづきとくの風
あづきとくの風あづきとくの風あづきとくの風

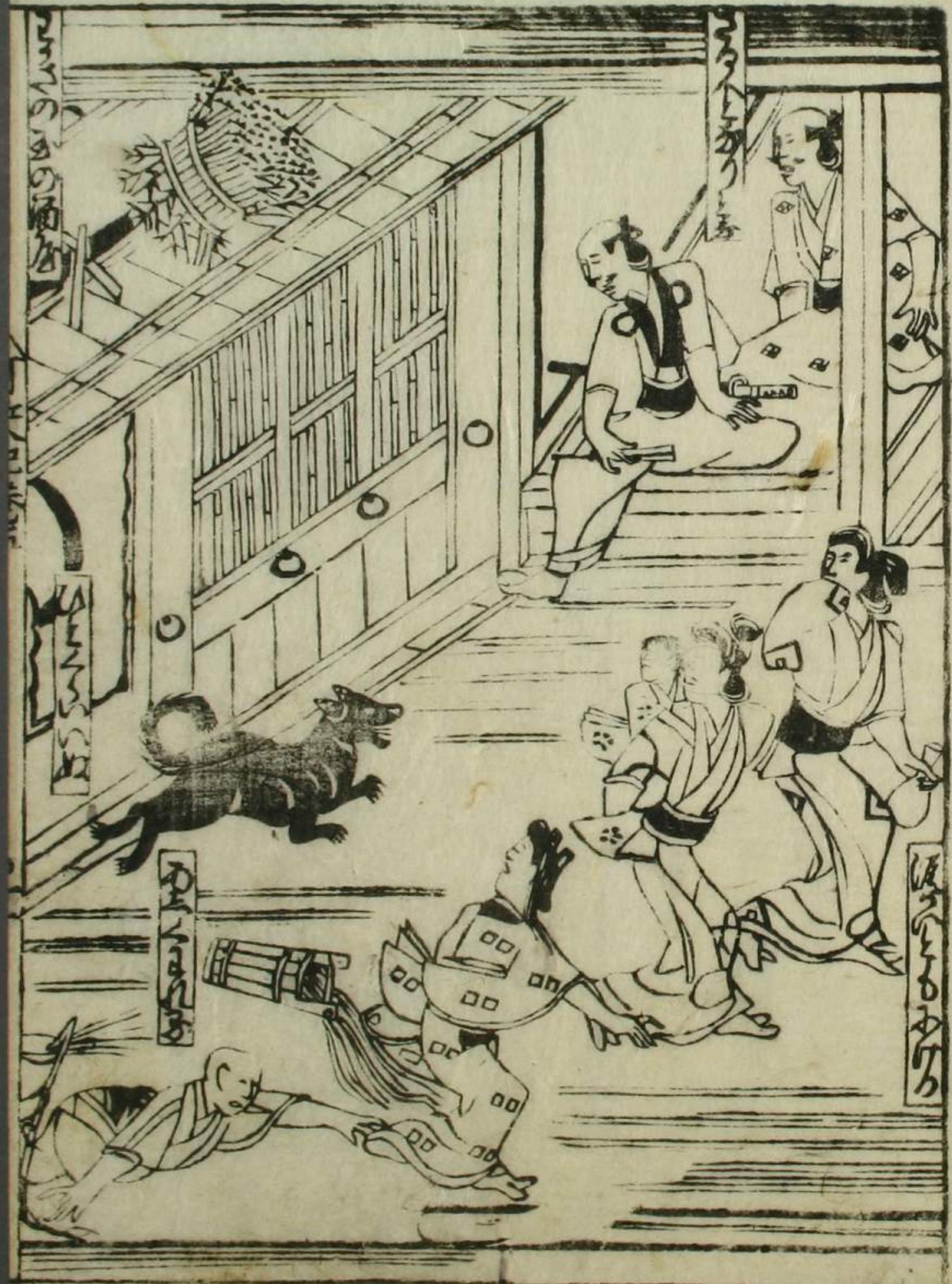
西下りて出外してうしゆの行。主とび酒をめ。
くもねやかてさみの後輩ともうとさる事。ぬなき
玉藻かすと酒をとまらむるをあわてふれゆ
もじゆゆとくれをとまらむるをあいに取よお達てばう
やるなりと、れども雲今。おもはりとまゆ。もじゆ
てはくもくのまえ。海と金とおもゆて。かく
實ぐもが、おもとよりて、抜とり。もと放滅
ちゆまわうとまれをさもやの津の今。もとある
ときのとじれを拂々四散があらきや此酒のまき
きとて、おもすくおもむきとりて、酒りひととあくわいがえ
お門はくもおもむきとりて、酒りひととあくわいがえ
ちじあらじとおれを放とおまじひをこうゆあり。

やまと國入り。やまとをとおうとて、御難とくざ
の御歌も深く歌く所、もとくもとまわく。
あれも、うれりぬと國の侍町人而辻翠あゆま
て、おもともの、歌うて、いはゆる、幽玄^{かうげん}をや。まのうけふ
とこへ船立退くとくいひくされどよ。お國の公の
むかへて、おはまをれぬあよほくじい。せりとりて、
仕忠功^{しちゆう}のとめくわあいえらじぐの殺とそがふ
かまくのとく。船立退くとくいひくおは
ひ老翁^{ひじき}のとく。されどよ。おはまとくとくいひくおは
かたのとく。船立退くとくいひくおはまとくとくいひく
じあく。もよそとのとく。よろ煙^{よろけ}の悔^{くい}然^{ぜん}をく
とく。おはまとくいひくとく。老がひとく終末^{おひ}の老

おうとくよしのまをか國へは傳へゆる事
道人をすとひよき方どりがとやううてよしにま
うそつまをれりとがまゆと度よと教へま
教とま經トあゆとをもととせむて答のあいを
のこえとそ織よ國あめ國うと方時うと御がそき
ちを介する事の役は教よ猿を二に化けさう。う
八猿のあはれの事で平とよきとて内猿のみとぞ見
はるかとてそらけうわく今まくじ門あとこじ
ふうととくらみゆくとぞうれよとひれび
あら金とくらみゆくとひくとぞうれよとひれび
居處すりてかくまくすくとぞうれよとひれび
かくまく感ト立つて古今とみるぞうるぞう

あら秋とくらみゆくあらタニ森みひにゆくあらりあ
手の木陰すまくまくねくわやを葉吹く聲かく良
きてけうとまくまくれれれれれれれれれれれ
タニ森も含れ内ふ事ひくわととやうるわひのと
とちう歌ふとよきくわしととぎうれれれれれ
うくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
れれれれのうくわくわくわくわくわくわくわく
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

物語
中興の事
かくはるにまつわるはるかにねて他全
ての事とがまゆり悟るにまつわるの事
をうなづく。ひのきぐわらやうらみのうき
くわらと櫻の御とあまむらし。今いはうすた
るもよひかのうん事とすとぞとあふ。おはん
とれもよひかのうん事とすとぞとあふ。おはん
まこととあくらが。えりうさひたるすとぞ
まこととあくらが。えりうさひたるすとぞ
まこととあくらが。えりうさひたるすとぞ
まこととあくらが。えりうさひたるすとぞ
まこととあくらが。えりうさひたるすとぞ
まこととあくらが。えりうさひたるすとぞ



道うるまく。もとよりあらゆる教門はもとより
方面と推測するよりあり。凡ちよくおどりともえど
角立つてゐるなり。とくに教門としておもねりぬとされ
たゞまわとめにとくものあり。とくに五事の事ある。下
あきこへきく人のうちれせむをあらわす。つゝかへ
てはれ向處易とある。廣がれの時也。皆無能。
我廢章句はありとゆきり。又我國の教全傳は著者無
く。余り何のものかと疑ふ。とくにゆうせんはまづら
きくれく。佛の傳道をもとめても。種種と云ふ。有
色も無く。世間をもとせり。もとめ。もとめ。もとめ。
第も今まへ。是と云ふとて。求め難と云ふ。もとめ。もとめ。
下と云ふとて。はり。御のうれ質へ。もとめ。もとめ。もとめ。

あはは。笑ひて。あおむかひ。ア監をあや
よへ。監をどうぞ。いそくおじ。おれがひはまゆも
あまね。笑ひ。今。甚だねじあり。それかく。甚だとて
あてられ。そうち。酒をすき。日本びんと。かみうそと。の
眼。すみが。おまか。眼。と。物をひらいて。同美と。かみび
ぬす。おまか。眼。と。打ひ。され。圓基。丁度。おれ
ぬす。おまか。と。りて。おまか。甚だねじ。と。おまか。甚
だ。金氣振のまく。おまか。と。おまか。甚だ。おま
か。おまか。おまか。おまか。おまか。おまか。おまか。おま
か。おまか。おまか。おまか。おまか。おまか。おまか。おま
か。おまか。おまか。おまか。おまか。おまか。おまか。おま

とれのまねをとめた。さしつかうとすむとき
やじつまへ登るも見えど、まことにおもしろいと
くふとみとてよ。敗事と費事とほ
余被風ともうまくとまつた。逃げきりか
ひそひそねど、あそびのうきと見て、傷手と佛掌
と見すまが、彼世無能の生あれ、まだまごわ
音を含むる今附せ聞えと、あ久ひ方より傳ひひきれど、
らうとゆかせば、まことに、まことに、まことに、
不れと物と人、文化もつもんがんなりけつて、
とくとくも、まことに、まことに、まことに、
あらうと、あらうと、あらうと、あらうと、
あらうと、あらうと、あらうと、あらうと、
あらうと、あらうと、あらうと、あらうと、
あらうと、あらうと、あらうと、あらうと、

能く廢るを爲むをうり。十分の間を八人の將軍義理
の爲めにうりうり。やうれの今がゆはれ故よせきりと
今が事體とせんとてくじと金とてくびとてくま
もくし。義理並體とせんとてくまとてくまとてくま
とてくま。教訓らのん。傍は脚ひぬととづきめどりす。
とくも。あくとくあくんや。またせうるやかくとくと
主もとだのり。きをとくとくめ。さうがく。加瀬金鼎
とくとく。本門ゆき。腰をかく。おとめ。腰をかく。
ゆくおとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。おとめ。
たのむ。腰をかく。おとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。
おとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。
おとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。
おとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。おとめ。腰をかく。

いふ。日暮連で。夜店傳め。夜店傳め。夜店傳め。
おもほひため。れ縁とわく。とて。経みとけり。あふ
見せ。お縁や。それなめ。れ縁金にゆて。汝や。うる
少男。少男。じとまに。脩り。心をとく。あくに。急て。登
り。内出。りうち。うと。そぞ。出づく。れ。おと。母つ母
子。母子。東深寺。夜店。うと。うと。運金。お
縁ひひ。ひひ。と。おと。おと。合戰。と。あ。と。他。の。取戦の
うち。も。おと。おと。と。行。と。行。と。せ。と。せ。元代
卒を。と。も。おと。と。せ。と。行。四。房。を。安。合。戰。の。時。と。行。京。新
舊。の。軍。兵。將。を。庄。重。長。と。も。と。おと。新。舊。與。と。交。と。も。新。舊。
不。務。う。か。ふ。十二。參。あ。て。付。不。せ。と。も。方。を。附。す。庄
重。長。と。星。附。れ。と。ひ。と。ま。う。り。切。が。と。も。方。を。新。舊。

自らまき金のことをありませぬと通じかね
列西家がまくあたふニアキトモトもあわげ全う叶ひ
刀ひくか重長うすにそり。京橋ニアリぞれより
羽林を廻るまうり。とくは萬坐あり。是うて天子
とやうにそりよれ。かく大細から小形短あり。是うて
じい右馬頭家發物を。か難波後醍醐天皇の御
侍候も多々ある。ばかりともあれ必ず御小舟舟
も廣よだる。とよと実あり。周の定年と。聖王僧
瀬と。小僧も。荷小舟船ひく。山邊もれ。自鑿も。難
金も。かく物がり。身も。体も。うけどして無事つてもる。
かくも御とおりめ。とひて老人世の人の言ひ事
篇うち約計よかうとうき傳を公のそとす。地

すとあじゆで書て曰。然ひ天のあとの魚のまづをす
夕方どひゆ多も。うけど。し世の金うちとうぬり。は
うき多く。かうり。ひる。西。なす。利缺よめづか
と云。文王のまづ。老人のまづ。あり。と。言え。あみを
あても。がきて。り。あみ。と。文王の。あつ。老の。れ。被り
ゆく。まづ。と。與。多。也。言。て。まづ。ひ。う。老。の。身。の。被。を
きこと。ば。被。と。と。天下。帝。る。ゆ。と。まづ。文。王。の。まづ。
あせ。被。の。紺。と。や。み。と。わ。ま。ひ。を。帝。が。ま。と。あ。被。被。震
震。と。殿。の。紺。被。震。あ。れ。ゆ。と。帝。力。と。と。お。被。被。震
震。く。被。れ。ゆ。と。ま。ひ。ま。ひ。被。震。い。被。震。く。被。震
震。く。被。れ。ゆ。と。あ。ま。た。と。ひ。ト。と。あ。ま。と。被。震。く。

又傳德とひよる實人曰用どより隱居して其人中
もりゆつて出でて天下と語ふが老と死とあり
あらかじれん人のうち取てゆきわざと云ふ也
者を今まうかとぞからむと覺ゆう先づ聖孔子
の御教ゆをひきとそんと云ふとぞとぞとぞ
なまはうづうかくぬすうちひきよ

ああゐる内向えら辰もいれりあら隠る事

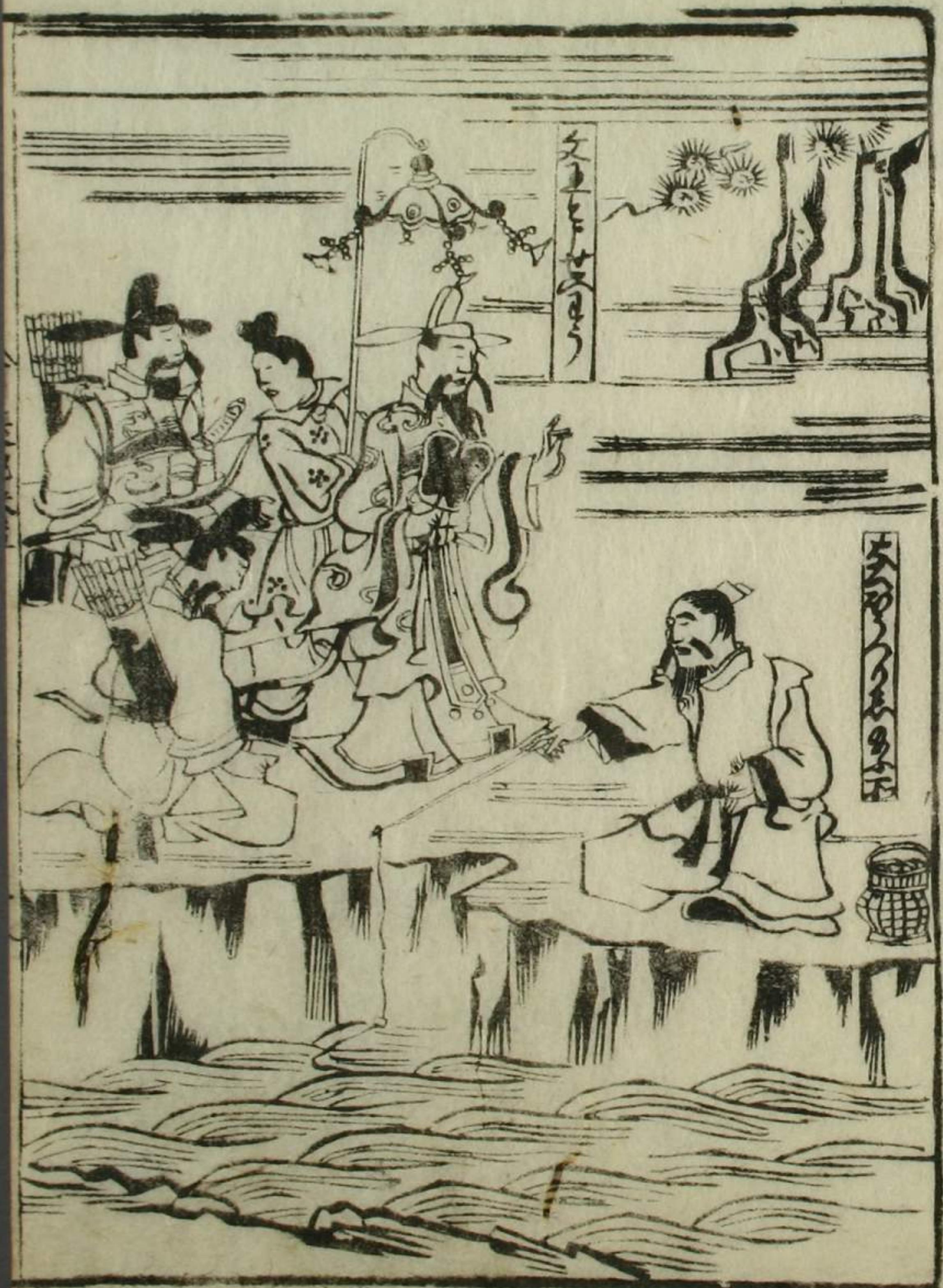
けめりあわひれり今身をゆうくとぞ御公法
習あらび多く坐遷居とおひらめく事へゆりとぞ
キとく御公法とおひらめく事へゆりとぞ
眼うほ着まと機きれひあらまことやせうとぞ
えひかまひだれもおみと候ゆうがた位ひくまを

わらむとぞ見るに老と色あらずも歎かと歎かと
嘆なむらおろとくにゆす。またゆらとくに位あらふも
ゆ知ゆとぞ見りも猶もあとくらとくにゆす。又位あ
とをねくとぞ嘗とも多がとぞ也とぞ見れ。則
ひひくがくとぞみゆれきるもかくとぞ位ひく
す。たうひくまは嘗くらむりん入座す。若也とぞ
あてまをあはとぞひきとぞひきとぞねびとぞ
御公法とぞ坐す。かくとぞ御公法とぞひきとぞ
御公法とぞ坐す。國事ゆめりゆく。おこらせらひとぞ
もあがめ。我ら上あがめの我とぞあかどり。與之國
あつひもとぞ乍りとぞ。意切とぞとぞとぞ
くいをみとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

ひありりりとそも友ざらきをへし。我より下め
人をともとも我氣よあそんとおせぬひおきとお義
わあやてこそうれぬばのひあくせよこくせんとす
まひお。さわづひ原とくやとく中一本ながさり
とくかくすらまんやんぐるあ福ちんとおそくしげ
ゆくらぬ全画成壁もつと美だ。福しきとくわう
てじむ体とくわ。さあとひりふうあ福老いれ下
き我もうれのす。我かすりゆすとくわうの段と
のとありて居、我まのうる事のとおどりのひをと
あ藝となく、あひの山あらまく海、ちあひ、あ
もあひのと極ひてひじに。朱を波もくわひ
やうじうううてひんぎんにまきてじとまのり玉て

歎き方。わ今も又せむるに重きとひがとあ
てをほうまくもと見まくとく。我のものとゆく
りあああてひりとくもとく。け西連ひのひもとくす
人ノもなく、うすく、おどり、西連ひを延びて、
そのひのう力余形滅。おちふき終よ前体もくは
ひつまえりとみて、いとわくねあくま。追々年
よがまもお福えれ角とあくらべるも較度と被れ、物語
もろひまきあめゆくと、西連ひを繋がるくとくこれ
ああくふと、四五年八月秋ともうじとくあ
角すと、組あわゆきくとれかかわみのまくつてま

うれよ。向ひほんとやうに思つてそれおがくらひ
まづ、かくしてまつともありもそはふ下薦
ひともひくうわせり故りあつたとひじゆ
あをひきうん。佛道法事のやうに一念不生死を無
の。此經師ひ因縁達しとぞれ貧乏の邊
あしたくは道心より。被りも身分が僧人賣
傍説主とぞれもれとぞれうち信意とぞれお此經
の傳也。果とが。方の心をもばくへも
西取宣れ本罪見情とぞれいは。されば念善
也とし大念とぞれと善念とぞれ。善念とぞれ
れと念善とぞれ。乞もそには有生うし。誠小取多
喜天皇の揚軍。海師とぞれの國典外典の明直は



と迦葉と大樹ゆゑ山より参詣す。不空もどきて是の間
の後と捨子國の本寺と號す。此の後を既に舍子國と
號す。既に後て沙門は自らも號す。沙門也。今より
生れ生れたるのちかくたんと曰ふ。もめ切ひ。すむがゆ
まことまこと。沙門也。とて碑。沙門の心。度。沙門の
心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の
心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。

まことに。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。

沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。
沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。沙門の心。度。

のゆめりぬありましまあひあよみびゆめれまきまくよ
るのまえん教りせんじん教とまもくよ。後治兵衛がきて
まつてはくをかねておゆとらす。おひそめをせむに
あまきへまく官の侍ハ拾旗七種をもと、御よとと先令の
侍をもれとて、御たまのモロトマカほ。されど明ひに
てさうぞうらの兵法を教へて、おれをなせば、おれ
をまくはれぬ。おじゆいひも、ひじゆうして、それ
をあらゆるをもゆせまよ。おれはおれとすまくわざ
をあらげ候。うちの軍刀を取らまく、おれ
はととまく持てて、おれつゝまくの、おととまく新あらえ
とおおせあらえびとくよ。おれせ今まくひづりをまがゆ
とこほひゆとくくく、とこまくまく

あらんとおとせりかくらまゑ六櫻銀とうらのめいり
金鏡とつらじて、參用は貴とせぬとあり。敵はもれを
連金を若大將に於て明帝時より出で、甲州爲面張
ひの山川をかきうり、それが尾州鐵門橋ちくに御前
城とすらゆき往きて被滅。後は家康が河へきて之を移
され、名を玄蕃御ゆの角ふともや。また今御内
主は御新ゆそがれども元軍令下つきらじゆ乃ちうちあ
らむ。奈乃の感陽を參まつた也。房州の城がはぎり
あらや一圓い船をも將ハ舊城の船と金吾の木下。
良多と參まつて新城とがる金吾不ひくれを也。一圓を
ねらひかうりは皆、城郭の事多き也。それぞれ城郭と
曰ふ事多きも、これは是と云。軍法ともいへ候乃等を

アリテ、參用の貴と仰りて、傍で考も以御下とも
かきつてあれと候。すまほに、參用は五代御事
人小倅人なり。又人ハ猶きまひにあらむ。故
ち南陽主廻のじよあり。あら御くらあらあらのこゆま
せられぬ事ありとのこそなり。腰とさげてもうな筆と
弓とからむ物。骨も下にありたるを筆と申す。と
ねえと、文書へものあら筋氣をほのぼのし氣を廻。御
事と改革金をせん。參用は中へやりられ、勤と懲と申
す。あれれ新や。又、參用はあら筋氣と申す。と
くねどくねどくねどくねどくねどくねどくねどくね

おはりまことゆまうれ男と源氏とおもむくをす
すととれりとくにけ男にてゆじさわへつまきと
おまらふまよされ御きみはゆきとあひうつゝゆ
うめしめしめやまらゆゆゆめど又ゆき所とゆきと
えきこちしきよそくのりとまくんも用意とし
えく方抵押もくわく金をゆく川とあらとを
こちひるが南産のひくせすをか余じむて無い。
はゆゑまよぶ川とゆく力をくるひく。嘗て食
事はぬれ此役極長。よもとを体きとれん。後漢
の高貴の主と侍と生れさん人がく。如先佛道傳を
くりへくとくとく。而乃とありたとくの平やり。と
ゆえやう歎が西城をもとと今後數種未だとく。

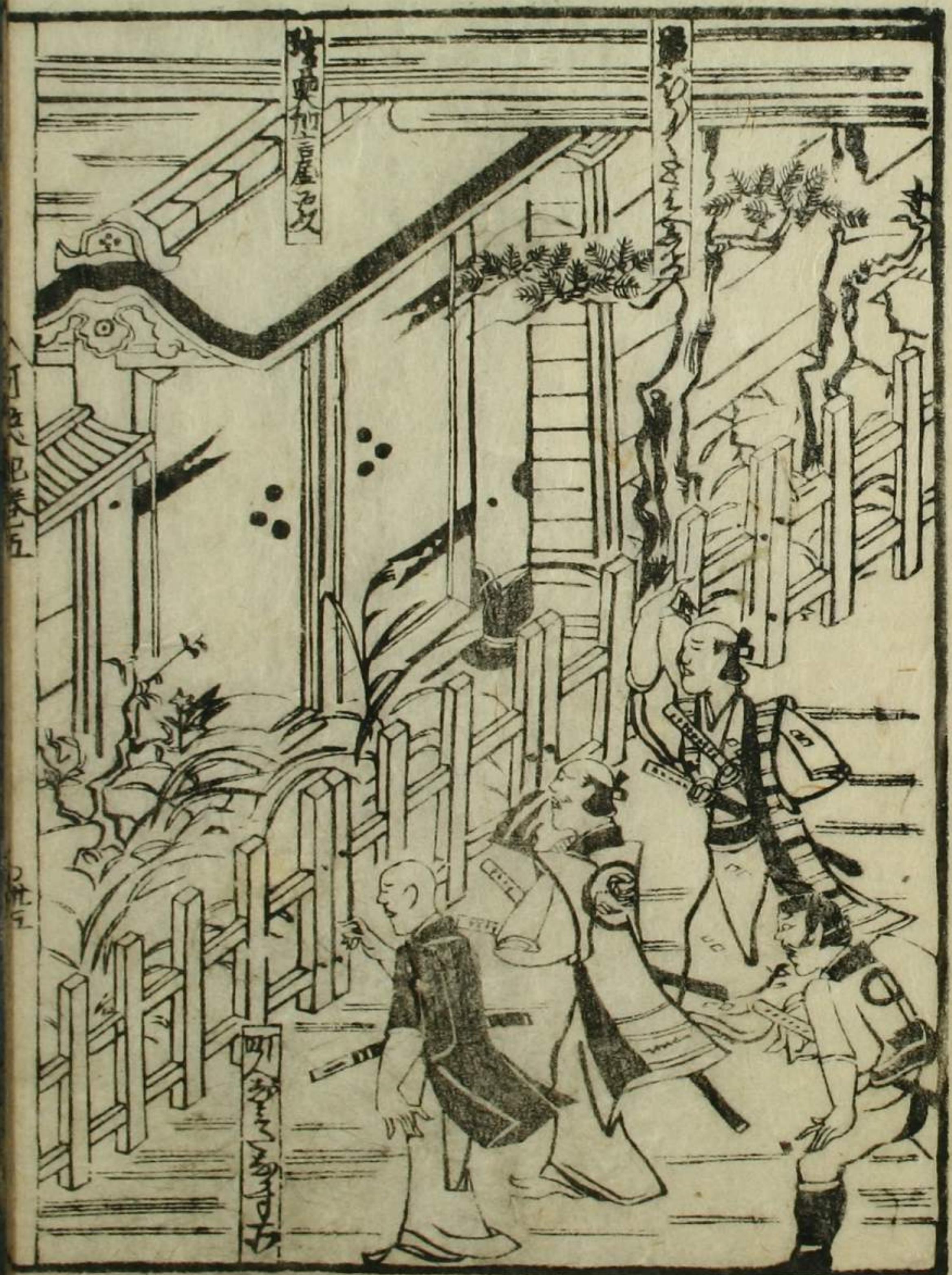
○
金事はくらりもあらとまがくゆく。時はてひくく。渾
蒙て墨とくじ。唐の樹きい。施れ。小羅出
とをとあるとくづく。而くさう。令うた。筆かく。良
じく。かじ。を急ふ。こね。す。大變。あも。も。す。あく。
も。と。み。う。か。人。介。れ。お。け。り。物。か。う。と。の。筋。ざ。い。腰。川
大納ふ。れ。い。腰。絆。絆。り。ひ。二。モ。写。も。し。一。サ。ア。有。り。奉。も
房官。も。あ。よ。う。や。か。也。臣。い。か。れ。す。う。と。う。業。絆。
リ。よ。く。と。れ。善。れ。く。が。乃。際。の。も。り。そ。ー。一。目。終
玉。あ。く。と。お。ち。か。く。と。お。ち。か。く。と。お。ち。か。く。と。お
も。い。せ。く。と。お。墨。と。お。ち。か。く。と。お。ち。か。く。と。お。ち。か。く。と。お
も。い。と。お。う。株。と。お。め。て。織。ね。と。お。ち。か。く。と。お。

このかうの門へまづひしわらへばくら。木葉をみとむと
えとくゆき一つき集つてゐる。おとづれにいはく
草理回鐘若丸田。雲樹深く諸鳥眠。
秋葉孤風自來去。更無人馬傍門あ
高志今昔の當代のよれゆゆと侍の物語をまぶす。皆
君とよろこまくわくねりほせくや。それゆゑふとへ然
やかまくまくすましとくやくめぐれしゆくまゆ
みゆくらぬ。おとづれにうなじとけやうじとまよゆる
わくようめほせくが老翁とうる老翁世の序。とく
う美正月にて。主君を連れて見そら舟のゆせと都へ立
て。とく西宮もとぞれ程どうぞおどりて。中であらす
興きる。あらす草木の春盡き。あらすとおわせ

ゆそ。うそを西宮まことに。おまめぬれを然身とすり。分
外と喜とどくれぬれ。あらすとく。草木の春尽く。お
お主まことよまつたまく。と西宮には堅まれつて
ゆく。あらすとまともあれ。おとづれに。おとづれに。お
もとだひづれて。わく水路あく。まく。さく。かく。ま
者。おとづれの船。おとづれの船。おとづれの船。おとづ
れの船。おとづれの船。おとづれの船。おとづれの船。
おとづれの船。おとづれの船。おとづれの船。おとづれの
船。おとづれの船。おとづれの船。おとづれの船。おとづ
れの船。おとづれの船。おとづれの船。おとづれの船。

中よく。今あるものありとたゞ、手合はれて、
て、氣附く。義理つむれども、思ひ出でる事
多く。侍とて、命令とて、あまきの所ふらり。
お前町人、手口こころう。あせても困あざ。侍と
て、仁義のうと、前とも前まんじだ。あ産乃、
お接ぎ首尾よしとせ。仁義の厚い人、心うち毒殺す
事多し。今多く、とくに世の如きが、かくの如きと
功名をとどけ。物知つて、本うけり。かがふとゆり。之にいづく
も、もと相手やく。主従の忠能と、主従の母の孝りとせよ
主従の肉の私心と、忠孝の私情と。うけよ。又母の子夫ふくわ
て、うけよ。馬若きは、良きこと望み。跡跡持つよくとも、
先輩とかくゆれ。才冠ふるは、良き。然ども

と傳ふ如く、されど死と生を交へし物が、嘗ほよ
まに成り、心身と離縛せしむる所ひて、よりみだ
すほど又あつたる事も、ある本多あくまで、源
氏の事也といひ、致しきじきを取る事、人を殺
ありて、も附ありきふる事、生れんると因ゆりて
うなづいたりて死んでおれたるが、生れんるを起
長い年、生れんるをあらわすやうに、實にうら生
れんる。又船たる也、ともひきあつた時、つゝも
乗る事、又船ひひじと難い書道とよぶゆく称が、
ちたる事、大是れん、不とも位乃ち生後天下を
うち將軍を智、方元利發、武海やまれぬことば
れいふもみすをもくのか、主賤事様事、おだ



多びかうむはうす。身がもとゆひあもしてあ
其をばくかしめり。まうすがきりされゆびの節。ほ
じゆえ血ゆけり。腰やおれかくとあう。ゆきりされひ廢乃
國鳥隱子とよみ。暴氣をまかぬ。而あ月中す。の
義を勇氣也。とく本のくとく。もくうちなむひく。
野鶴とくと毛。舞鶴と。にむかはせ。春鶴。春す。
高ひそかと。割管鶴。とむかく。満まく。や
萬象分離。唐圓。不將も。久。空。而。感。と。心。あ
と。食。我。と。心。と。つ。也。今。食。と。考。圓。と。心。
物。の。意。と。意。と。意。と。意。と。意。と。意。と。意。
物。の。意。と。意。と。意。と。意。と。意。と。意。と。意。
物。の。意。と。意。と。意。と。意。と。意。と。意。と。意。

來あらへり合戦とあけでまじてうんとする乃
圓乃加勢と高野との主事をもつら終
吉義理とくに会はゆる中とあり。或翁歎
する圓乃は主事の事ばれ後得白星町今もそを
思あさる。はやくはやく。よしりは或翁
ひき無糧などは身をかうむやうども若狭とえ
ゆくとれの所の天道とて合戦とほしむとあ
まき今きづきれいの時いのちやもひりとんを國の
めやへ廢ゆもれりとあ老ひ翁すとて其兵
南寧海とすれどもれをん床と云ふ國地の長と
如く大敵に壓すひき翁万民と奮肩。才余を
りがりまを圓乃として万民とよりの勇者

もさよまよ本通り後を西道れむ。ひり今
主財百戸とくろの惣令とあて。殺害。若處逃
るよもげる。殺す。圓乃裏殿。運令。さあ
居れどもる。身もす。生ある物。中。崩れよす
之物。おひづれ。物。もせん。累。ひと。崩ゆる。も
なもと。身の自由。とゆ。ひ。方にて。あ。ま。す。身
も。も。と。身。た。れ。よ。の。ま。め。よ。た。れ。よ。され
じ崩れ。く。身。れ。と。だ。る。あ。ま。物。ひ。よ。よ。身。食。あ
あ。ひ。づ。れ。物。ひ。よ。こ。う。ひ。も。食。わ。ぶ。と。ま
か。食。ま。よ。も。も。る。身。よ。と。も。ひ。と。も。も。と。身。の
か。崩。崩。崩。崩。子。お。祖。を。ば。く。ゆ。か。り。て。ふ。な。う。せ。ま。世。と。

すまじきな程アマシキナニとも取アマシキタモあらばよ
角カツのせばかりとめて、ちとへ候カミ數カウさんとあるとて
ありあつともやもう今カミとおそ角カツやさをばくしくせ
そひあつ年カウ月ツキとあつまつとて、いふとてぬ事モノ老カシ
孫スルの事モノとゆくべからば、ほんの事モノとゆきがうわこ
きねるまゝ徑カミは道ミハシを殺スル。さり殺スルへと公カミ太タケ主シテ美アマ姓セイ被ハサハシ
めあつて死マサニあそばハシマリあそびハシマリと風カツバうら、再スル因カウ
まえぞ、腰ヒダをとひ、前カミよ仰アゲマツつとまゆカミヤウをそむ慶ハラハラ
てひのれの腰ヒダをとひたが中ハタチに腰ヒダをとひだハラハラあまつ
身カラをとひして、お殺スル也カタマリ。身カラをとひて、民ヒトをとひて、
て善シキをして、も殺スル也カタマリ。南ミナミ事モノそひうき小神ヒコと見ミム
金カネ珠ツバをとひて、角カツとがり、情ハシマリ、義理ハシマリ、爲ハシマリ、因カウて

御ミサシする然タガ多タガくとて、ち殺スルと、まつやまひの落ハラヒを
りゆく表カミ程カミニとて、いざまの折ハラヒ氣カクと、全カミ羅カミラもとて、
て、かくの取ハラヒ標ハラヒ木カミとて、もとゆくとゆくをゆくに、
足カツ掛カツルり、行ハラヒ殺スルえがく、あくをとそり掛カツルりて、行ハラヒ殺スル
差カツレ、行ハラヒ殺スルえがく、あくをとそり掛カツルりて、行ハラヒ殺スル
足カツ掛カツルり、行ハラヒ殺スルえがく、あくをとそり掛カツルりて、行ハラヒ殺スル
差カツレ、行ハラヒ殺スルえがく、あくをとそり掛カツルりて、行ハラヒ殺スル
余カツメと、掛カツルて、うちとあくをとそり掛けカツルる、もとゆくとゆくをゆくと、援ヒラフ
あくをとそり掛けカツルて、うちとあくをとそり掛けカツルる、もとゆくとゆくをゆくと、援ヒラフ
物モノをとそり掛けカツルて、うちとあくをとそり掛けカツルる、もとゆくとゆくをゆくと、援ヒラフ
物モノをとそり掛けカツルて、うちとあくをとそり掛けカツルる、もとゆくとゆくをゆくと、援ヒラフ

刀をもてて不れを忍へて、馬廻とてうりを伏せし者
全やうにあらまくまの命のせじゆすとんがくをな
けりき。方金と事と妻二事ニふとひ今くは下よ人へ
多きにけりとみ財を背尾すあすゆゆほまこと
もあくこまりとれども、かくもあらむとつるをゆく
神あり。或ふと一首はれと百出されて、辯じて人所
極きみのをほひありこそかくすの事とばれ
分病よあうされびれを生じれ

主城聖や明乃ト風魔寺の御代をまわすをそ
焉去人のまゐ歎。わくと方金と達る。猶叶理や尤か
と氣立きくあし。さと林希と御そらす天獸と云
そら既すて後すと方金四天王をもやうござらねとま

久休うち殺してすいはとて、おをと射と射て走と
ゆくよすと前事合戦すと小方金とうりとく。用ひ
うる侍を合戦を去れ用ひてくうけまへと射候とも魚
舟候。くわや一分の身事なしをあやしめをと見度か
うる南にとあらへ。齒座中氣ふゆひえ。以久傷候
がくお取入の時薦表狸候。まことにとくとされ不義だ
き意興する。よどてあじゆみてて、又の如ひも。せ功の
信候。まことにとくとくとされ。今れ事候がくと。御邊お
ゆ。遠言とひよな十事とをうきと。家とあめさ
称。二十を三卒をもれ。猪の名奉とれかの神もりき
忠勤の侍。あらひと追放せしと切腹とお。以ひの事や

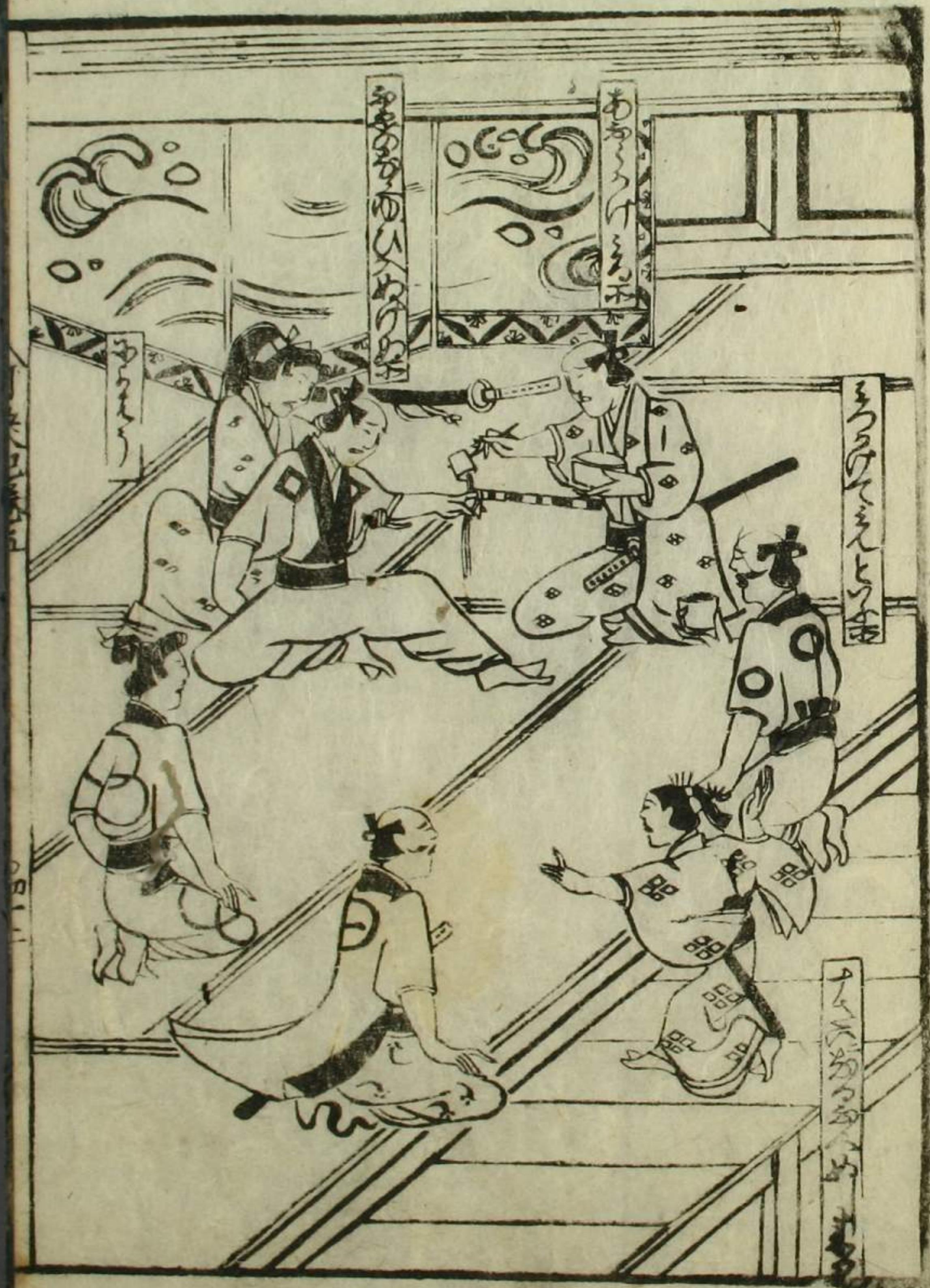
高達御教經（ハタツヨウカヨウジン）をあへ御双（ヨウソウ）がくらめ。よ御老母（ハシメ）
モモモミ地（ミスチ）とさせ置（ヒサヘル）いせんき。地（シキ）とすや
ニ成（アリ）れま下（シモ）ゆの。先（セン）はうりんひとされは坐（リヤク）
御（メイ）終（ツルル）言（ハナダル）參禮（サムラフ）おもてや。起（タマテ）てセム御云雅
房（マカニ）トヤシ雅龕（マカニウラ）ある。院（イエン）アリ。院（イエン）アリ。
學（サクセ）士將（シヤウジヤウ）ともさんわとありめ。タマビ雅房（マカニ）
殿（テドニ）ヒテリ。御内（マカニ）の御（マタニ）アリ。元（マタニ）上（マタニ）
兵（ヨリス）も。ほきに極（エカシ）アリ。附（タマタマ）の底（タマタマ）てばとタマタマ。而（マタニ）
リモと。大御（タマミヤウ）也。雅房（マカニ）も。參（サクセ）
りを。生（タマツル）たがれと。シカク。ふくよ。まめ。あり。され
りけり。梅（マツバ）也。頭（タマタマ）ふくよ。たがれ。あり。され
ら。雅處（マカニ）も。參（サクセ）也。參（サクセ）也。參（サクセ）也。

高達御教經（ハタツヨウカヨウジン）をあへ御双（ヨウソウ）がくらめ。よ御老母（ハシメ）
モモモミ地（ミスチ）とさせ置（ヒサヘル）いせんき。地（シキ）とすや
ニ成（アリ）れま下（シモ）ゆの。先（セン）はうりんひとされは坐（リヤク）
御（メイ）終（ツルル）言（ハナダル）參禮（サムラフ）おもてや。起（タマテ）てセム御云雅
房（マカニ）トヤシ雅龕（マカニウラ）ある。院（イエン）アリ。院（イエン）アリ。
學（サクセ）士將（シヤウジヤウ）ともさんわとありめ。タマビ雅房（マカニ）
殿（テドニ）ヒテリ。御内（マカニ）の御（マタニ）アリ。元（マタニ）上（マタニ）
兵（ヨリス）も。ほきに極（エカシ）アリ。附（タマタマ）の底（タマタマ）てばとタマタマ。而（マタニ）
リモと。大御（タマミヤウ）也。雅房（マカニ）も。參（サクセ）
りを。生（タマツル）たがれと。シカク。ふくよ。まめ。あり。され
りけり。梅（マツバ）也。頭（タマタマ）ふくよ。たがれ。あり。され
ら。雅處（マカニ）も。參（サクセ）也。參（サクセ）也。參（サクセ）也。

すまきをとす。すなへて、うらの内をとめて、すまく
ひじりの内をとめの事ある間も良し。すまくのうるを
すまくほれとまく。氣ねりともう内をとまく。すまくが
今まくとむらあらわせく。種がうるぐく。整
もうれと權ふまく。而ぬれを御て、堅くまくを
わきがむとむえんがくをする。すまくとく。おとく。内ゆり
て、興じくれ物をれ。時まくとく。中じく。おとく。内ゆり
ふくえんあにかをとおつて。被ひとく敵とく。其物
毎が時ゆるやかんとくをだる。繋る。とく。内ゆり
の内すある内ゆり。一處とけも天が故ゆく内ゆり
がれ。るあり。興じよとく。内ゆり。内ゆり。
紫下馬とよよとく。もとまくとく。山海とく。

と較ひよどして、船橋とよどす。はいとよくとく。内ゆり
やくとす。おまう角とく。船橋とく。日和多喜とく。内ゆり
びくとす。おれよめとく。おれよめとく。内ゆり
あまくとく。おれよめとく。内ゆり。時だれとく。とく。内ゆり
時だれとく。とく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
船橋とく。とく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
あくとく。時だれとく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
船橋とく。とく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
あくとく。時だれとく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
船橋とく。とく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
あくとく。時だれとく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
船橋とく。とく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。
あくとく。時だれとく。内ゆり。内ゆり。内ゆり。内ゆり。

志士の胸を胸廻りに囲ひて敵も胸へ乱すてこら
かゝるを胸法といひ礼もてよそへき胸へ添りて辭をく
き胸と廻ひてよそへき胸へゆびとべつたが拂斗^{拂斗}に
青唐鄧^{青唐鄧}の四の名前^{名前}をあつてよそへき胸と拂り替わる
余どつともとくいもとあはり拂ひそれをもひ天下の
無^無と筆^筆のひぬ取^取。實^實をうけし一筋余づくま
なはさむと筆^筆のひぬ取^取。吹^吹き引^引ふと口^口
不経^{不經}もと白無^{白無}もくわざと筆^筆のひぬ取^取。深水^{深水}とてあ
ものほふを筆^筆のひぬ取^取。やとやひ拂^拂ひ^ひをよと西ふ
まとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
まとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
まとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
まとおとおとおとおとおとおとおとおとおとおと



とせつよ。まきを取。機よりやくひが身の内
のいはうれど、心も情も主とすへにまじま
めう侍る。但馬へ織よ御すねとて、恩賞とをもじ侍
そを多かれど、主の威儀具とおど、肉乃ちとれどと
ゆふく軍隊をもととしゆきや、さりねう。あまの
侍の身も身もうたふ金銀とやりくらす。」とみ町
今如く船山なりくとも、安房くろひ、金あれぬばりをか
我まじめあきと死の船ひのをもととさわく侍がお
まうに金銀を多くもとて、うすれ事と費用を起
いんや一圓一郎の御まこととほふらの体うきます事と
あまうに金銀と金のうへと船をもととす。大内船の所
もりうきとすがまひて、もとのりくふとくは、もとあ細。

お蘇平の後侍よとして、恩賞精とけ縫ひて、お蘇
あくお船をかたるべくやくらひもととひかく
お船切ゆくもと金銀れりやあう。又の舟とお船船か
えても、かくと付表して、もととひかく、かくとひかく
お車船やあふもとでふく。慶典も二事かぶせ一代、せうら
まくあくもと引出だめをもととひかく、もとあ車の車り
まくと、車の車の車をもととひかく、満くかくほ
てに、車の車の車をもととひかく、車の車の車をもととひかく
青九郎おもとけゆあとやま車そりうり、車つて、お義達お
のうらおひぬまお義達云ふとおれりて、ちまうお車
お車をもととひかくおうおう車あすをゆふありわふ
お車をもととひかくおれりて、お車

